寄稿

インドで児童労働を考える

経済・国際経済学科「NGO論」スタディーツアーに参加して

経済学部国際経済学科の「NGO論」（指導・狐崎知己教授）で、今夏、インドでのスタディーツアーに参加した田中彩友美さん（経済2）から体験記が届いた。国際開発協力に取り組むNGO（非政府組織）活動について学ぶ同授業では今夏、学生13人がアフリカ、アジアなどの途上国の人々の暮らしと、NGOの活動状況を肌身で経験してきた。

「まず子どもたちの人権を守るべき」

田中　彩友美（経済2）

8月26日からNGO団体ACEのスタディーツアーに参加し、9日間、インドに行ってきました。

このツアーは、「インドで子どもに会って考える旅」と題されている通り、子どもの問題、児童労働を一番のテーマにしています。農村部の70％が児童労働をしているというインドに実際に訪れて、現地のNGO機関を訪問したり、児童労働をしていた子どもたちに実際に会ったり、プロジェクトが行われている村に出向いたりと、現地の状態を直接、肌で感じるツアーになっています。

私はアジアの途上国（フィリピン）に住んでいたことがあり、途上国の貧困、特に子どもの問題について関心がありました。

専大の国際経済学科に入学したのもそのためです。中学のころから、現地に行き、自分の目で実際に現状を見てみたいと思っていました。それが今回、参加した理由でもあります。

ツアーは本当に刺激的なことがたくさんありました。まず私が一番楽しみにしていたことは、現地の子どもたちとの交流です。その中で、一番印象に残ったのは、バルアシュラムという、児童労働をしていた子どもたちがNGO機関に救出され、収容されているリハビリ施設でのさまざまな体験です。

▲　バルアシュラムで子どもたちに歓迎される田中さん（右）

キラキラした笑顔

私はその施設で3日間ほど過ごし、バルアシュラムの生活を体験し、子どもたちと踊ったり、日本のおもちゃで一緒に遊んだりして、たくさん触れ合いました。

遊んで交流を深めるだけでなく、子どもたちに直接話を聞き、質問をする機会もありました。児童労働についての質問は、過去の傷をえぐってしまうようで、正直投げかけづらかったのですが、そのことを子どもたちに聞くと「つらい過去ではあるけれど、そのことをもっと多くの人に知ってほしいから質問されても平気」と真剣なまなざしで応えてくれました。

彼らは多くの人に現実を知らせることによって、自分と同じような経験をする子どもを少しでも減らしたいと思っています。小さい子どもたちなのに本当にすごいと感銘を受けました。

また勉学にもとても熱心。10歳くらいの子が自ら新聞を手に取って読み始め、自由時間も図書館で勉強していました。私より年下の子が、英語を流暢（りゅうちょう）に話しているのを聞いたときには、驚きとともに敗北感をもち、「私も頑張ろう」と刺激を受けました。

◀　インドの子どもたち

このスタディーツアーに参加して、全力で子どもを守り、児童労働を防ごうとしている機関がたくさんあることが分かりました。どの機関も、一人ひとりの子どもの人権を大切にしており、だからこそ過去に児童労働をしていた子どもたちも、キラキラした素敵な笑顔で笑えるのだし、勉学に真剣に取り組めるのだと思いました。

私はこのツアーに参加する前は、将来は国を担っていく子どもなのだから児童労働はやめさせるべき、と考えていました。しかしその前に、子どもとしての人権を守り、確立させていくことが大事なのではないかと思うようになりました。そのためには、子どもの権利をきちんと理解し、児童労働をさせない社会を大人たちがつくっていくことが大事だと思います。

故郷が被災―苦難乗り越え未来へ一歩

牛の目にも涙―東北被災地を訪ねる

ゼミで学んだ「現場」の重さ

横田　香奈さん（文4）　寄稿

牛の目にも涙。3月11日の東日本大震災で、実家のある福島県は地震・津波・原発事故・風評被害の4重苦を負った。祖父の家（田村市）で飼っている牛たちは、周りの静かな変化に気付いているかのような表情を浮かべていた。

▲　女川の漁港付近に立つ横田さん

地震から約2週間後、福島に帰り、そこでいつもと違う空気を感じた。テレビの映像や写真だけでは伝わらないもの、わからないものが現場にはあるとその時思った。

大学2年次から入っている山田健太先生のゼミナールは通称〝お散歩ゼミ〟。自分たちの足で現場を訪れ、生の声を聞くことから学生たちは

新聞記者として頑張る

そう呼んでいる。今の私にとって、そこから学んだことは大きい。

8月のゼミ合宿では、仙台・石巻・女川に行った。「復興」の文字を駅で目にする。しかし、甚大な津波被害を受けた女川の漁港近くに入ると一気に何もなくなった。二階建てのビルがそのまま横たわり、家の表札だけがぽつんと残り、しゃもじや茶わん、湯飲みなどがそこら中に転がっていた。

震災から5カ月以上経ったその時も、現場の生々しさや震災の傷跡を痛いほど感じた。

南相馬の中高生に東京案内も

9月には、南相馬市の合唱団MJCアンサンブルの女子中高生たちを東京案内した。彼女たちは、震災と原発事故により離れ離れになってしまった。そのためなかなか皆が集まることができなかったという。しかし、久しぶりに仲間たちと会い、歌い、遊び、無邪気に笑う姿は、普通の中高生と何も変わらない。

▲　心なしか悲しげな表情の牛たち

ただ、次の日にはまたばらばらに散り、別々の暮らしを送ること、同じ古里に帰れないということだけが今までと違っていた。

現場に行き、自分の目で見ること、人の生の声を聞くことが、何かを知ろうとする上で一番大切なことだと思う。

来年から私は、その見たり聞いたりした事実を伝える新聞記者（毎日新聞）になる。これまで経験し、感じてきた痛みや喜びを忘れずに、今まで以上に足を動かし頑張りたい。

今は、祖父の家の、まもなく迎える牛たちの出産現場に足を運ぼうと考えている。

豪フットボール本場でテレビ出演、観戦も

「人の命を守る仕事で貢献したい」

専修パワーズ
渡邉　一徳さん
（法4）

オーストラリアンフットボール愛好会・専修パワーズの前主将・渡邉一徳さん（法4）は、9月26日、メルボルンで開かれた本場・豪のオーストラリアンフットボールの最優秀選手賞「ブラウンロウ賞」の受賞パーティーに招待された。その模様が「チャンネル7」のテレビスポーツ番組で生放送された。

東日本大震災で被災した渡邉さんの祖父母は宮城県亘理町・荒浜地区に住む。受賞パーティーには渡邉さんら地震・洪水など自然災害に遭った国で活躍するオーストラリアンフットボールの選手6人が招待された。

パーティーのリハーサルやミーティングで関係者と話す機会があり、本番では歴代メダリストが続々パーティーテーブルに訪れ、ボールにサインをしてもらったという。

同24日はオーストラリアンフットボールリーグのセミファイナルの試合を観戦。「チャンネル7」の厚意により、特別シートで熱戦を見た。

「オーストラリアンフットボールを続けてきて本当に良かったです」

渡邉さんは大学2年次から同愛好会に入り、ポジションはジャンプ力などオールラウンドのプレーが要求されるラック。今期、パワーズは日本オーストラリアンフットボール協会（JAFL）トップリーグ6チーム中4位の好成績を収めた。

来年4月からは、警視庁に就職が決まっている。仙台育英学園高校に入学して間もなく、ウォークラリー開催中に酒気帯び運転の車が突っ込み、生徒3人が死亡、多数の生徒が重軽傷を負う大事故が起きた。「今回の地震・津波でも命の重さを強く感じました」。人の命を守る仕事に就きたいと思ったそうだ。

「オーストラリアンフットボールは卒業後も続けることはできませんが、たくさんの思い出ができました」